

第1学年1組 生活科「いっしょにあそぼう」の実践から

園児や友達との関わりを通して、相手の思いを考えながら、相手と関わる楽しさが分かるとともに、進んで触れ合い交流することができる子ども

1 はじめに

本校第1学年は、市内約20校園から園児が集まり構成している。自分の学級に知り合いがいない子どもも多く、学校生活に期待感と不安感をもって入学して来る。今年度は、期待感よりも漠然とした学校生活に対する不安感を抱え、登校時に泣いてくる子どもが例年よりも多かった。その要因として、コロナ禍で幼児期を過ごしてきたことも考えられるのではないだろうか。様々な制限の中で幼児期を過ごした子どもたちは、多様な他者との関わりをもちにくかったとも言えるだろう。

令和4年度から、文部科学省では架け橋プログラム¹を推進している。そこで、本校生活科で昨年度から見直してきた「遊び」を中心とした年間カリキュラムの中に、架け橋プログラムにつながる他者との関わりを設けることを検討してきた。また本校に隣接したこども園の先生方と、子どもに対するアプローチの仕方や1年生と園児との年間における交流について協議してきた。そのことを基に、本稿について考察していく。さらに、本校の研究にける今年度の重点の一つ「人との関わり」についても、合わせて考察していく。

2 自己実現する楽しさを感じ始めた1学期（園児との出会い）

「今日はSさんと、ベリージュース屋さんをしよう」「足温泉に入りたいな。今日は、わたしもやってみよう」「R君の船がすごい！ぼくなら、この丸いカップで作りたい。ぐんぐん進むといいな」

1学期の「からふるあそびけんきゅうたい」では、外遊びを軸に、身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊び込んできた。単元終末には、上記のように自分のやりたいこと（目的意識）が明確になり、自信をもって遊び進める子どもが多かった。また、友達の遊びにも目を向け、進んで体験しようとする子どもが増えた。そうすることで子ども一人一人が、さらに自分のやりたい遊びについて「～するのもいいな」と工夫しながら遊ぶようになっていった。

このように学級全体で、思い切り自分を表現できるようになってきた7月上旬、子どもたちが校庭で外遊びをしていると、園児（にじ組）が遊びに来た。「からふるあそびけんきゅうたい」の単元終末ということもあり、多くの子どもが自分の遊びに没頭する中、何人かの子どもが、園児を自分の遊びに誘ったり、園児の遊びに加わったりし始めた。その後、学級全体の振り返りでは、自分の遊びについて想起するだけでなく、園児との関わりも学級の友達と同様に楽しかったと紹介する子どももいた。さらに数日後の休み時間、子どもたちが校庭に遊びに行くと、園児が遊具で遊んでいた。数人の子どもが園児に話しかけると、園庭にある泡遊びに招待され一緒に遊び始めた。そんな体験をした頃、にじ組の先生から一通のメールが来た。園児やこども園の先生からの思いを感じた子どもたちは「からふるあそびけんきゅうたい」の最後の活動に園児を招待することにした。



初めての足温泉は気持ちいいな♪

<ねんくみのみなさんへ>

このまえは、やすみじかんに にじぐみのこと おはなして くれて ありがとう。にじぐみのこたちが、もっとがっこうで あそびたいなどはなしています。こんど いっしょに あそべませんか。 にじぐみ

<こども園の先生からのメール>

1 子どもに関わる大人が立場を越えて連携し、架け橋期（義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間）にふさわしい主体的、対話的で深い学びの実現を図り、一人一人の多様性に配慮した上で、全ての子どもに学びや生活の基盤を育むことを目指すもの。

活動が始まると、知美は、校庭の大きな鉄棒に挑戦しようとする園児を見つけた。話しかけたいという思いはあるものの、中々話しかけられず、友達と様子を見ていた。しかし、話しかけることをあきらめたのか、ほかの遊びをやりたくなったのか、鉄棒を後にした。

活動後半に、知美の様子を見ると、多くの園児と虫取りをしていた。まだ緊張感のある表情だったが、活動前半とは違い、園児との虫取りを一緒に楽しもうとする、知美の行動の変化を感じた。この日、知美は以下のように思いを記録した。



(どうする?)

<にじ組さんと虫とりをしたよ>

今日、わたしは、にじ組さんと一緒に虫取りをしました。にじ組の男の子がトンボを捕まえました。それを見たわたしはびっくりしてすごいと思いました。それで、わたしは、にじ組さんたちと遊ぶのが慣れてきました。最初は、初めて会う子だったので、緊張していました。でも、勇気をもって誘おうとしたけれど、無理でした。でも、最後は虫取りをして楽しかったです。また、2学期もにじ組さんと遊びたいです。あとは、遊びをもっともっとパワーアップしたいです。

事前に、こども園の先生と教師は、この一日で子ども同士を結び付けるのではなく、小学校生活に慣れ始めたこの時期だからこそ、どのような関わりを子ども同士がもてるか見守る姿勢で活動を進めようと話し合っていた。

3 子どもの思いでつなぐ単元の始まり（園児との再会）

2学期になり、子どもたちは近隣の公園での生き物探しを楽しんでいた。活動を進めると「もっといろいろな葉っぱを見付けたいな。葉っぱゲームでパーティーができそう」「初めて自分でバッタを捕まえられたよ。お世話をしたいな」「いろいろな虫をお世話できる虫ハウスをつくりたい」など、自分らしい生き物に対する思いのある活動をし始めた。そのような子どもの姿を、教師はこども園の先生と情報共有した。2学期に、再度、園児との交流を設定するにあたり、子ども同士で「～をやってみよう」と思いが高まる出会いにしたいと話し合った。そこで、園児の校外学習を1年生の生き物探しをしている公園と同じ場所にし、自然に子ども同士が会う設定にした。久しぶりに会った子どもたちは、それぞれの公園遊びを楽しむ中で、一緒に虫探しをしたり、遊具で遊んだりしていった。園児が公園を一足先に帰る頃、こども園の先生が「今日は、楽しかったです。今度は、1年生もこども園に遊びに来てね」と子どもたちに話しかけた。この瞬間、多くの子どもたちが、園児との活動イメージをもてたようで、元気よく「行きたいです」「(園児に) また遊ぼうね」など、返事をした。こども園の先生との連携するよさを感じた瞬間でもあった。



そうっとさわろう

4 子どもの思いでつなぐ単元の始まり

(困り感に寄り添う子どもたち)

こども園の先生からの誘いに本気になった子どもたちは、こども園に行く計画を立て始めた。そんな中、浮かない表情の子どもが二人いた。(右記は、その時の様子である。)

- T こども園の先生に誘ってもらったね。
- C 1 行きたい!
- C 2 こども園の子と遊びたいな。
- T 休み時間にもよく会えるし、特別に行かなくてもいいんじゃない?

知美は県外から来た子どもで、自分の知っている保育所とは違う場所で、園児と関わることに不安を感じていた。同様に加奈も、初めて関わる相手を想定し、学級の友達との関りよりも難しいと考えていた。二人の困り感を学級で共有することで、それまで「行きたい」「遊びたい」と話していた子どもも、本当に園児と一緒に遊べるのか真剣に考え始めた。また、園児と友達になりたいという思いを学級で共有したことで、これまでの関わり（1学期や公園活動）よりも、相手との関わりを具体的にイメージする必要感を子ども一人一人がもったようだった。

そこで、学級全体で、自分が幼児期の頃、どんな遊びが好きだったのか、また保育所や幼稚園等がそれぞれどんな場所で何があったのかについて、情報を共有するようにした。約20校園から集まった1年生のため、一人一人の幼児期の思い出が多様であり、自分とは違う遊びの経験や自分の園にはない物がある友達の思い出に興味を惹かれる子どももいた。

すると「こども園はどんなところなのかな」とつぶやく子どもがおり、教師は「こども園のことを知れば、みんなで遊べそうなの？」と聞く場面があった。それを機に「こども園に行ってみたい」と思いが高まり、こっそりお昼寝作戦²を執行することになった。この作戦を通して子どもたちは、園児の顔写真や名前のポスターをよく見たり、園庭やお遊戯室にある遊び場での園児の様子をこども園の先生に聞いたりしながら、園児との交流への思いを高めていった。また多くの子どもが、園児と友達になりたいという思いをもち、学級全体としての目的となった。

5 いっしょにあそぼう（園児との交流）

園児との交流1回目は、にじ組の得意なドッジボールから始まった。子どもたちは自由参加で、試合をしたり応援をしたり、それぞれの方法で園児と関わることにした。知美は、窓際で試合の様子をじっと見ていた。経験の少ないドッジボールに加わることに緊張感もあったようだが、それ以上に、園児の様子や園児と一緒に思い切り試合をする1年生の様子に見入っていた。ドッジボールが終わると、園児の自由遊びが始まり1年生も加わった。活動始め知美は、1年生の友達とにじ組の教室をじっくりと見たり、園児がどんな遊びをしているのか全体の活動を見たりしていた。活動後半も1年生の友達と一緒に、園児の様々な遊びに加わっていった。この日の知美は教師から見ると、多くの時間を園児の様子をうかがっているように見えた。しかし、知美の記録（次項）からは、知美なりに園児に関わろうとしていたことが分かった。



窓際で、試合の様子をじっと見る知美

C1 いや、行った方がいいよ。もっと友達³になれるし。

T ほかの人も、こども園の子と、友達にまでなりたいの？

(学級の大半の子どもが挙手をする中、知美と加奈だけが手を挙げなかった)

T 加奈さんは、どう思うの。

加奈 うーん。上手く話せるかな。

T 確かにね。心配なこともあるよね。知美さんも、心配なことがあるのかな。

知美 行ったことがないから・・・

T 確かに。行ったことがないと、みんな心配かな。

全体（うなづく子どもが多い）

2 園児が昼寝をしている間に、こども園探検を行うことを子どもたちが命名した作戦。探検を通して子どもたちは、大きな積み木のある遊戯室や何種類もある砂遊びの道具など、園児と一緒に遊ぶために魅力的な場所や物に溢れているところだと知る機会になる。

3 子どもたちにとっての友達とは、その人の性格を知り、けんかをして仲直りできる人。

このことから、子どもによっては、他者と関わることに慎重になったり、関わりたいという思いをもつからこそ多くの他者（園児）を見たりして『この子となら話せそう。遊べそう』と判断しながら関わっていくことが分かってきた。知美以外の子どもたちも、自分なりのペースで楽しみながら1回目の交流を終えた。1回目の交流を学級全体で振り返ると、知美のように園児の様子をうかがいながら行動する子どもがいる一方で、園児に自ら話しかける子どももいたことが話題になった。「Aさんは、ずっとリレーをにじ組さんとしていたの!」「一人でも一緒に遊べてすごいな」「B君は、にじ組さんに話しかけるの上手なんだね」など、自由遊びの中で、自分だけでも園児に関わる子どもたちに憧れを抱くようになっていった。そこで、2回目の交流は自由遊びを中心に行うことになった。

K君とあそんだよ

わたしは、K君と遊んで楽しかったです。どうしてかという、色々しゃべったり、ぶらんこで一緒に遊んだり、折り紙を一緒に折ったり、色々なことができたからです。

交流1回目：知美の記録

2回目の交流で子どもたちは、1回目の交流で園児と楽しく遊んだドッジボールや泡遊び、砂遊びと一緒にやろうと計画した。しかし活動が進むと、始めは1年生と一緒に遊んでいた園児が次々と違う遊びをやり始めた。一方、1年生も自分のやりたい遊びに夢中で、遊びが二極化（1年生の遊びと園児の遊び）していた。このことに気付いた教師は、活動の振り返りで子どもたちに問いかけた。（左記）

T 今日、どうでしたか。
 C1 楽しかった。泡遊びやれてよかった。
 C2 ドッジボールを前よりいっぱいやれて、よかったな。
 T みんなが目指していた、にじ組さんたちと友達になることは、どうでしたか。
 全体 （うーん・・・）
 T 確かにみんな楽しそうだなと、先生も思いました。でも、みんながこども園でやりたかったことって、こういう遊びだったのかな。
 全体 （うーん・・・）
 C3 自由遊びは楽しいから続けたいな。
 C4 うん。にじ組さんたちも好きだしね。
 T でも、今日みたいな感じにはしたくないんだよね？どうしたらいいだろうね。
 勇気 自己紹介をした方がよかったかも。
 C5 そうだね。

教師の問いかけを基に、子どもたちは、自分や園児の遊びについて見直すようになっていった。すると、園児も自分たちも楽しく遊べる自由遊びは続けたいが、このままでいいのかという話題になった。また勇気をつぶやきから、自己紹介を相手（園児）にあまりしていなかったという振り返りが全体に広まった。子どもたちの考えとしては、もっと自己紹介をして、名前だけでなく誕生日や好きな物など相手のことをよく知り、そこから自由遊びをするとさらに仲よくなるということだった。そこで子どもたちは3回目の交流に向けて、園児と1年生役に分かれ、自己紹介の練習を始めた。

3回目の交流では、どんな相手とも（例：男女関係なく）自己紹介をして友達になりたいという思いの基、活動が始まった。知美は、自分とペアになった園児の話真剣に聞き、これまでの交流よりも自分から相手に関わろうとしていることが、授業導入の姿からも分かった。（以下の写真は、3回目の交流での知美の様子である）



好きな〇〇は何？



キッチン遊び楽しいよね♪



一緒に競争しよう！

知美は、その後の自由遊びでも、ペアの園児に教室を案内してもらったり、園庭でのかけっこを楽しんだり、互いにやりたいことを聞き合いながら、活動終わりまでペアの園児との遊びを楽しんでいた。また知美だけでなく、ほかの子どもも自分のペアの園児と活動終わりまでずっと関わるようになっていた。このような園児との交流は、知美の姿一つをとっても、主体的に相手と関わるまでには時間がかかる。また教師は、子ども一人一人の思いを見取りながら、時には、子ども自身に活動の楽しさだけでなく、子ども自身が本気でやりたいことに向き合うような発問をし、活動を見守っていく必要性を感じた。

6 おわりに

Sちゃんとおくんへ

この前は、かくれんぼをして楽しかったね。またやろうね！

Sちゃんとお君、かくれんぼで隠れるの上手だね♡

1年生になるの楽しみかな？教室には、工作の道具とか厚紙とか色々なものがあるんだよ！また今度学校に遊びにきてね！！

1年生の教室で待っているよ！！Sちゃん、お君大好きだよ！



3回の交流を終えた 知美の手紙

今度は外に行こう！

右上の写真は、3回目の交流で中遊びを楽しんだ知美がペアの園児と外遊びをしようとする際、玄関先で教師と会った時の様子である。教師とは短い時間の会話だったが、その間、ペアの園児とずっと手をつないでおり、これまでの交流の知美とは違い、自信をもって行動していることが分かった。その後、3回の交流を振り返る中で、これまで関わった園児の話題が多く挙がった。その中で園児たちも、もうすぐ1年生になることに気付く子どもがいた。そこで、交流で関わった園児に、各自、交流のことや1年生について伝えたいことなどを手紙に書くことになった。知美の手紙（上記）からは、園児と遊んだ楽しい思いだけでなく『かくれんぼで隠れるの上手だね♡』のように、知美が感じる園児のよさまで表していた。手紙の最後には『1年生の教室で待っているよ！大好きだよ』とあり、今後も園児と関わりたいという、これまでの関わりに肯定的な思いがあるからこそその内容で締めくくっていた。このように、園児に対する肯定的な思いのある手紙は、知美だけでなく、ほかの子どもも同様だった。

1学期から徐々に園児との交流を始め、2学期後半には自分なりに園児との関わりを想起できるようになった子どもの姿から、1年生の生活科として「遊び」を中心とした年間カリキュラムにしていくことは、幼保小の架け橋プログラムにもつながることが分かってきた。本校の立地のよさである隣接したこども園との連携を、課題ともなる約20校園から集まる新入生の1年間の学びにつなげることは、子どもの実態にも合うのだろう。そのためには、小学校の教師とこども園の先生方との細やかな連携が必要になる。実際に今年度は、1学期から始めた直接的な打合せ、電話やメール、互いの授業参観や1日教師（保育者）体験なども合わせると、現時点（12月）で約20回以上の教師間のやり取りがある。学校種を越えて気軽に話し合える関係をこども園の先生方とつくってきた成果だと考える。今後（3学期）は、園児の成長を願う1年生の思いをつなぐような活動を設定していきたい。

さらに、今年度の本校研究の重点の一つ「人との関わり」における、園児との交流について考察し、結びとする。「いっしょにあそぼう」の中で、子どもたちは明確な目的意識や相手意識の芽生えをもつようになるだけでなく、活動中での自分の変容に気付く場面が多くあった。多様な他者との関わりの中に、自分の行動を振り返る活動を繰り返すことで（「できるかな？」「ぼくが幼稚園の頃はね…」「こうしたら〇〇ちゃん（園児）も、うれしいかもしれない」「もっと～をしてみたい」）のように、不安感や期待感をもつ体験をしてきた。その中で見つめ直すのは、自分自身であり、言葉では表現しきれない思いを「（相手と）一緒に遊びたい」という行動の中に、思い切り表現していくことが分かってきた。生活科の内容（9）自分の成長に、今後につながるような学びを子どもたちの思いに合わせてつくってきたい。